抱負らしきもの

法学部長　山本敬三

この度，法学部長に就任し，その責任の重さを感じております。あらたまって抱負というものでもありませんが，この機会にささやかな感想を述べてみます。

現在の世界は正に激動の中にあります。ソ連のペレストロイカにはじまり，東ヨーロッパ諸国の変動，東西ドイツの統一，そして中東の湾岸戦争と，誰もが予想できなかったような大事件が相次いで発生しました。これらの事態とくに湾岸戦争に対応するわが国内の論議には大きな混乱がみられました。今日における社会科学の知識の必要性が痛感されます。

最近は大学においても自然科学系，特に技術系の異常な肥大が目をひきます。大学には適正規模というものがありますが，これは量的な全体の大きさだけではなく，質的にも，人文・社会科学の系統と自然科学の系統が調和を保つことを意味します。大学全体として学問がバランスを保ちながら発展することが是非とも必要です。広島大学においても社会科学系の充実が強くのぞまれるところです。

社会科学の対象となる社会現象は，自然と切りはなすことのできない環境の中で意識をもっている人間の営みとして現われます。したがって社会科学の探究においては，他の諸科学におけるより，人間性，人間味が要求されます。理論としていかにすぐれたものであっても，人間味に欠けていれば，それは人間の社会においては適合しないものになります。東欧諸国における経済理論の変動の歴史は，一つの貴重な実験であったといってよいでしょう。法の分野でも同様なことがいえます。法治国家としてわれわれは多くの法によって規制されていますが，その適用・解釈に人間味が失なわれたとき，法は人間を苦しめる具になりかねません。正に「両刃の剣」といわれるゆえんです。

社会科学を探究する法学部においては，「カネ」や「モノ」に支配されることなく，「ヒト」として主体性をもち，人間味のある対応のできる学生が育つことを期待します。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは，「学校とは，できあがった解決ずみの知識を扱うところであり，大学は学問というものをまだ解決されていない問題として扱うところである」と述べています。大学は単なる教育機関ではなく，研究こそが何よりも優先します。研究に専念できる良き環境を創るために，誠心誠意つとめたいと思います。

ところで，法学部の西条移転も，現実の問題として青写真作成の段階に入ってきました。移転に関して最も問題となるのは「第二部問題」です。現在，法学部と経済学部には，国立大学としては数少ない第二部（夜間部）がおかれ，勤労学生のための大学教育が行なわれており，その実をあげています。経済大国化にともない，たしかに昔に比べれば，勤労学生は少なくなってきております。しかしなお，昼働かないと大学に行けない人は多数おります。職場のある広島地区から西条へ通うことは不可能です。第二部を広島市内に残置することは絶対に必要と考えられます。各方面の人間味のある御協力を切にお願いする次第です。